ラオスでの JICA ボランティア活動について

JICA 海外協力隊 2019 年度 2 次隊

甲藤（かっとう）　瞳（ひとみ）（日本語教育）

2021 年 12 月に、2 年の任期を終えラオスから帰国しました甲藤瞳と申します。私は、ラオスで 2 番目の日本語学科（2017 年開設）があるサワンナケート大学に赴任しておりました。

どんな活動をしていた？

設置後 3～4 年目の日本語学科で、同僚教員の教授力・日本語力向上や、カリキュラムの改善、学生の日本語力向上に取り組みました。その他、同僚教員と協働で卒論指導や教師研修を行いました。コロナ禍で 9 ヶ月ほど一時帰国をしていましたが、学生が自分のスマホを使ってオンライン授業に参加し続けてくれたおかげで、どこにいても何とか活動を継続することができました。

なぜ JICA 海外協力隊に？

実は、前職はラオス国立大学の日本語学科（2003 年開設）の日本語教師でした。そこで 2 年働いている間に多くの協力隊員と出会い、みんなが生き生きとして楽しそうだったこと、専門も背景も多種多様な人と出逢えることに魅力を感じて協力隊を志望しました。派遣先として再びラオスを希望したのは、慣れた土地でこれまでの経験を還元したいと思ったからです。

コロナ禍での活動で大切にしていたことは？

「現地の人に寄り添う姿勢を持つこと」です。たとえコロナ禍で離れていても、できるだけ近くで、同じ目線で同じものを見たいと思っていました。先生と連絡するとき、急ぎだけど記録が残らなくてもいいときはボイスメッセージ、すぐに相手の反応を知りたいときは通話、書類を確認しながら話したいときはビデオ通話などと使い分けるようにしていました（ラオス人の先生が使い分けて私に連絡をくれたので、それを真似しました）。オンライン授業のときは、早く入室してくれた学生に「〇〇さん、今日のサワンナケートの天気はどう？」と聞くようにしていました。ラオスでは、大雨だとネットの調子が悪くなり、途中で参加できなくなる学生が出てしまうためです。

現地で学んだことは？

「心にユーモアを持つこと」です。サワンナケートで出会ったラオス人は大らかで陽気な人が多く、いつも楽しそうでした。授業でも、学生のセンスが光る瞬間があります。「名詞＋ほしいです」の授業で、「今、何でももらえます。何がほしいですか？」と聞くと、「携帯電話、バイク…」と学生たちが答えていく中で、「妻がほしいです。日本人の妻がほしいです」と最後に答えて笑いを取った学生がいました。周りを楽しませる姿勢、今いる場を明るくしようとする姿勢はラオスを離れた今も大切にしています。

この寄稿はラオスでの活動のほんの一部ではありますが、少しでもラオスで日本語教育に関わる先生や学生たちを身近に感じていただけたら嬉しいです。最後までご覧くださりありがとうございました！

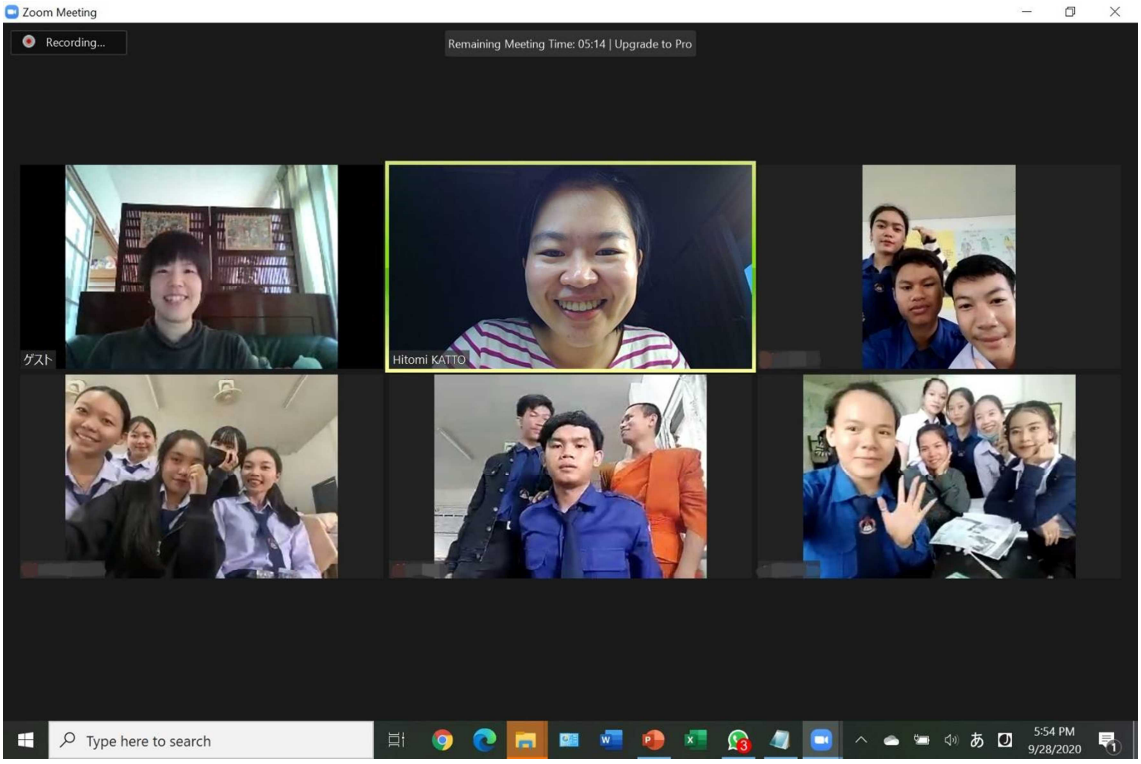
★できるだけ近くで（ラオス人の先生は３名。寄稿者、左から２番目）

★できるだけ同じ目線で（3 期生 19 名と。学生は 4 学年で 88 名）

★吉本興業のフランポネさんを招いて「漫才で覚える日本語」をしたときの学生のネタ

AB ： どーもー！
A ： サワンナケートから来た　カムラーです。
B ： カンムアンから来た　ポーカムです。
A ： コンビ名は、
AB ： メコン沿いです。よろしくお願いします。

B ： ねぇ、カムラーさん。昼は何を食べましたか？
A ： え～と、私は、魚とパンを食べました。あなたは？
B ： 私は、たばこと野菜を食べました。おいしかったですよ。
A ： え～？それ、「たばこ」じゃなくて、「たまご」でしょ？
もう　いいよ。どうも　ありがとうございました。

★1 期生の卒論中間発表後の集合写真（本当は 1 期生 20 名なのですが、先に帰ってしまった学生も…笑）

★オンラインのおかげで、色々なゲスト(写真 左上)に参加してもらいました！